

宗祇は今宿（厚狭）の町に入ると、ここで長光寺の塔婆（五重塔）を仰ぎました。そのあと山道を行き、埴生の浜辺で町長の家に宿を借りますが、宗祇はこの家で「ぞんざいではなく、とても懇切な接待を受けた。」と言っています。

翌朝、宗祇は埴生の浦から船に乗って、長府へと向かいました。

（飯尾宗祇『筑紫道記』より）

【おすすめの1冊】

新日本古典文学大系 51 中世日記紀行集（図書）

福田 秀一

（文・写真：香川 真澄）



洞玄寺経塔



洞玄寺本堂

さんようおのだ文芸散歩



俳聖、厚狭の町をゆく

あまり知られていませんが、ここ厚狭の町に、俳句の生みの親で、あの松尾芭蕉より200年以上も前に生まれた室町時代の俳聖：飯尾宗祇(いとおそうぎ)がやって来たことがあります。1480年6月のことでした。宗祇は舟本の町で、

吹きしぐる稲景の雲の山おろし

と癸句を詠んでいます。これは、山から来る雨風が稲穂に吹きつけているさまを写生したもので、宗祇はこの句について「(この土地の)旧友があまりにも厚くもてなしてくれたので言葉では詠みづらい、ここは友へのお礼は抜きで、見たままの景色を写すに留めておこう」と感想を述べています。